

乗鞍岳産ノリクラミヤマヒサゴメツキの形態について

大平仁夫

Some morphological notes on *Homotechnes motshulskyi hirayuanus*
(COLEOPTERA: Elateridae, Dendrometrinae, Hypnoidini) from
Mt. Norikura-dake in Nagano Prefecture, Honshu, Japan

Hitoo ÔHIRA

Abstract: *Homotechnes motshulskyi hirayuanus* (KISHII, 2001) was originally described from Mt. Norikura-dake (alt. 3,026 m) in the Hida Mountain Range, Central Japan, Honshu. At present, the subsp. *hirayuanus* also found from Hirayu pass, Hirayu spa and Abou pass in Gifu Prefecture. On Mt. Norikura-dake this subspecies was generally found from upland higher than 1,500 m altitude. Body length 8~9 mm, black and shining. The principal structures of this unique subspecies by SEM are indicated in Fig. 1, A-J.

長野県安曇村の岐阜県との県境に位置する乗鞍岳(標高3,026m)の山頂部一帯は、中部山岳国立公園内の代表的な高山動植物の観察地として知られている。ここに分布するミヤマヒサゴメツキは、岸井(1989)が山頂部の西北斜面で斉藤昌弘氏が見出した資料に基づいて分類学的知見を報告しており、併せて平湯温泉、徳本峠、島々谷や上高地あたりに分布する標本も検している。そのご、KISHII(2001)は乗鞍岳産についてヒラユミヤマヒサゴメツキ(*H. m. hirayuanus*)と命名、新亜種として記載している。

本文を草するにあたり、乗鞍岳産の資料を提供していただいた東京都品川区の森田誠司氏、乗鞍岳で見出した資料についてご教示いただいた栃木県足利市の大川秀雄氏、本文について指導を頂いた名古屋大学大学院生命農学研究科の大場裕一博士に心から御礼を申しあげる。

1. 分布・生態の概要

乗鞍岳産の本種について、岸井(1989)の報告によれば、1988年7月9日(4♂, 1♀)と7月30日(2♀)に平湯登山道(岐阜県)の標高1,500~1,700 mで斉藤昌弘氏採集の個体を調査、併せて平湯温泉産(岐阜県)(1♀)や徳本峠産(長野県)(5♂, 1♀)、島々谷産(長野県)(1♂)、上高地産(長野県)(3♀)の個体とも比較し、乗鞍岳産の雌雄の成虫と雄交尾器と雌内部生殖器のブラシ状物の形態などを図示、「これらの各地域産は分布域がきわめて近接していること、形態上の差異も大きく明瞭なものとは言い難い」としている。また、大平(1968)が徳本峠産(完模式標本の産地)、岩魚止産、島々谷産、上高地産などの個体をもとにフトミヤマヒサゴメツキ(*H. m. fleutiauxi*)と命名し、平湯産も安房峠産も含めている。この亜種の扱いについて岸井(1989)は若干の問題点を提示している。そのご KISHII(2001)は前記の斉藤昌弘氏採集の乗鞍岳産の1♂を完模式標本に、残りの3♂, 1♀を副模式標本に指定し、さらに平湯温泉で直海俊一郎氏採集(7~8-I-1980)の1♀を加えてヒラユミヤマヒサゴメツキ(*H. m. hirayuanus*)という新亜種名を付けて記載し、分布は乗鞍岳、平湯峠、平湯温泉、安房峠(いずれも岐阜県)としている。

このたび筆者がここに図示(Fig. 1, A-J)した個体は、大川氏が乗鞍岳の「乗鞍スカイライン」の山頂部付近の車道沿いのハイマツ帯のところで見出した資料で、長野県側の記録としてはこれが最初である。

2. 形態の概要

雄。体長は8 mm~9 mm 内外。体は短大で黒色、光沢を有する。両側は上翅の中央部あたりでもっとも幅

広くなり、背面は膨隆し、「ひさご型」は顕著である (Fig. 1, A)。口器、前胸背板の後角部、体下面の大部分は暗褐色を呈する。

頭部の前頭部の正中中部は幅狭く、その外側部は幅広く偏平状 (Fig. 1, J↑) を呈するが、前頭横隆線沿いの内側部も偏平状を呈し、全面にやや粗雑点刻を印する (Fig. 1, J)。前頭横隆線は孤状で、前縁中央部は弱く抑圧されるが、隆起線は消失しない (Fig. 1, J↑)。触角は短く、末端は前胸背板の後角に達しない (Fig. 1, A)。その第2節は棍棒状で第3節よりやや短く、第3節は倒円錐形状を呈し、第4節から鋸歯状を呈するが第4節は第3節よりわずかに長い (Fig. 1F)。

前胸背板は矩形状で後角を含めて幅よりやや長く、両側は後角末端でもっとも幅広く、後角は後方に短くとがる (Fig. 1, I)。前胸背板の正中中部には平滑隆線や縦凹溝は生じない (Fig. 1I, ↑)。小盾板は偏平状で幅広い舌状 (Fig. 1, C)。前胸腹板突起の側面からの後半は緩く外方に湾曲し、末端は鈍くとがる (Fig. 1, B)。腰板の内半部は幅広く、その外縁は弱く外方に湾曲する (Fig. 1, D↑)。上翅の条線は深く印し、凹溝状を呈する (Fig. 1, E↑)。

雄交尾器の中央突起は側突起より長く突出して末端は細まって鈍くとがる (Fig. 1, G)。側突起の末端部の三角形状部は長さより幅広く、外側縁は弱く内方に湾曲し、外縁角は後外方に鋭くとがる (Fig. 1, H↑) (この末端はややく字状に湾曲しているが、直線状の個体もある)。また、外縁沿いに数本の感覚毛を不規則に生じる (Fig. 1, H↑)。

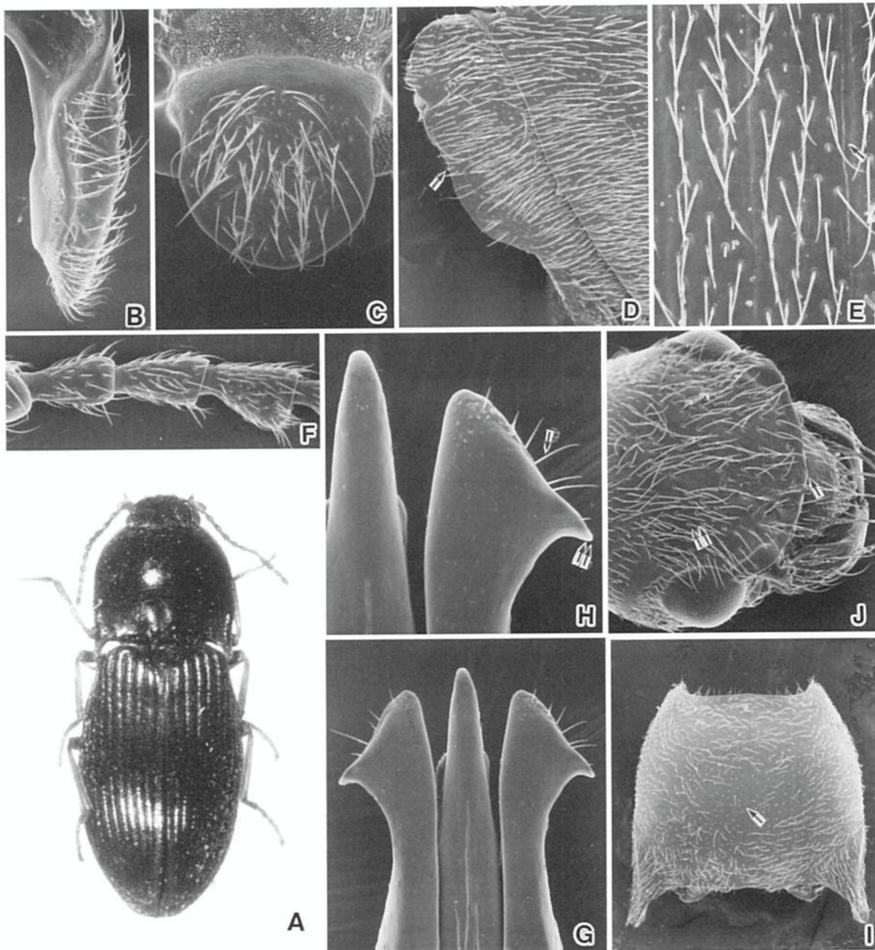


Fig. 1. A-J, *H. motschulskyi hirayuanus* (ヒラユミヤマヒサゴメツキ), ♂, from Mt. Norikuda-dake, Nagano prefecture. A, body length 9 mm; B, prosternal process, lateral aspect; C, scutellum; D, left basal plate; E, 2nd and 3rd intervals of right elytron; F, 2nd to 4th segments of left antenna; G and H, apical portion of male genitalia, dorsal aspect; I, pronotum, dorsal aspect; J, head dorsal aspect.

雌。一般外形は雄に類似するが、体は一般により大形で体長は 10 mm 内外、触角の第 3 節はより細長い倒円錐状を呈し、第 4 節とはほぼ等長である。

3. その他について

乗鞍岳とその周辺地域に分布する本亜種の実体については、さらに近隣地域に分布する別亜種の個体ともより詳しい比較が必要であるが、乗鞍岳の山頂部に分布する個体の体長は 10 mm 以下の小形のが多く、一般形態は木曾駒ヶ岳産に類似している。しかし、これら両亜種の分布は山系が異なっているので、系統的に近いかどうかは不明である。また、乗鞍岳に通じる山系の安房峠（標高 1,820 m）や平湯温泉（標高 1,230 m）や上高地（標高 1,500 m）に分布する個体は一般により大形で体長は 10 mm 内外のものが多いし、上翅の肩角部の細まりが明瞭で、「ひさご型」がより顕著である。体長や体形が分布地域の標高で異なるのは、他の山系でも見られることであるが、生息地の自然環境（食物や気象環境など）にも深く関係しているように思われるので、分類学上での亜種としての位置付けには、DNA 系統解析や他の形質なども取り入れて考察することが今後は必要になると思われる。

調査標本：5♂2♀♀，乗鞍岳山頂部，7-VII-2000，大川秀雄採集。

引用文献

岸井 尚，1989. 乗鞍岳のミヤマヒサゴメツキ. 福井虫報, (5): 9-12.

KISHII, T., 1999. A check-list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (42): 1-144, ref. 23.

———, 2001. Four new subspecies of *Homotechnes Motschulskyi* (FLEUTIAUX, 1902) (Coleoptera: Elateridae) and a new locality of *H. m. etchu* KISHII, 1996. Some new forms of Elateridae in Japan (XXXIV). *Ent. Rev. Japan*, 56(2): 51-62.

大平仁夫，1968. ミヤマヒサゴメツキについての知見 (1). 昆虫学評論, 21(1): 25-32.

(大平: 〒444-3511 岡崎市舞木町狐山 6-4)

○長崎県におけるババチビドロムシの記録

ババチビドロムシ *Babalimnichus masamii* M. SATO は海岸の岩礁に生息するチビドロムシである。九州においてババチビドロムシは中島 (2005) により宮崎県から記録されたのみで、長崎県からは未記録であった。筆者は長崎県西海市において本種を得たので報告する。

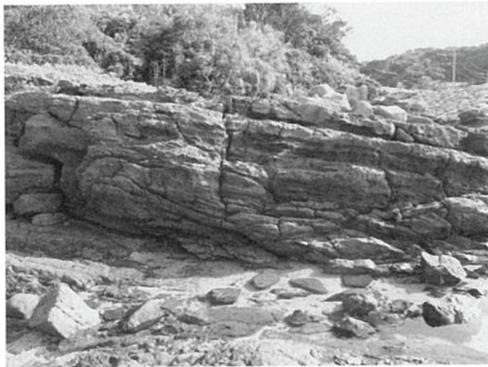


図 1. 生息環境

1 ex., 長崎県西海市崎戸町西中戸, 26. VIII. 2009, 筆者採集・保管。

採集場所は西彼杵半島の西方に浮かぶ大島と蛸浦島を結ぶ中戸橋の蛸浦島側近郊の岩礁である (図 1)。岩礁の隙間を歩いている個体を発見した。周辺を探したが発見できたのは 1 頭のみであった。

末筆ながら、本稿を執筆するにあたりご助力を頂いた今坂正一氏と採集に同行して頂いた沼田京子氏に心からお礼申し上げる。

引用文献

中島 淳，2005. ババチビドロムシの九州 (宮崎県) からの採集記録. 甲虫ニュース, (151): 17-18.

(神戸大学大学院昆虫機能学研究室, 藤原淳一)

○トラフホソバネカミキリの福島県における記録

トラフホソバネカミキリ *Traninus variegatus variegatus* BATES の東北地方における採集記録は青森県以外では多くないと思われる。筆者は山形県酒田市飛島での本種の採集例を報告しているが (大木, 1983), 福島県の会津地方でも採集しているので報告しておく。

1♀, 福島県館岩村新田原, 14. VII. 1984, 大木裕採集・保管。

夕刻にチップ工場の土場の周囲にある張り出した枝をスィーピングして得られたものである。

本記録の投稿を推奨していただいた露木繁雄氏に心からの謝辞を申し上げます。

引用文献

大木 裕，1983. 山形県飛島のカミキリ 13 種. 月刊むし, (144): 33.

(〒225-0015 横浜市青葉区荏田北 2-17-13, 大木 裕)

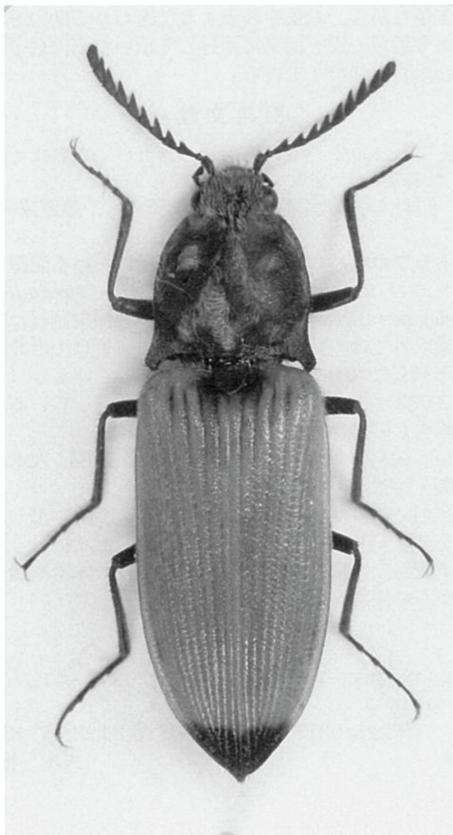
○ツマグロヒラタコメツキ雌の興味深い生態観察例

ツマグロヒラタコメツキ *Anostirus (Anostirus) castaneus japonicus* KISHII et ÔHIRA, 1956 は、中部以北の本州および北海道に分布する色彩に特徴のあるコメツキムシである。日本のものは、ユーラシアに広く分布する基亜種に比べ、大型でより強壯であることや、触角の形状、前胸背板の毛の色彩や点刻状態の違いにより、別亜種として区別されている。個体数はたいへん少なく、これまでに一度に多くの個体が観察された例はないようである。生態については、これまでに花や薪などに飛来した報告例が散見されるほか、「道路脇のミズナラやケヤキの新芽に午前10時から午後2時頃までの間に飛来した」という興味深い報告例(下山, 1979)がある。

筆者のひとり中村は、山形県において、本種雌個体が倒木の根に多数飛来するという興味ある生態を観察することができたので、ここに報告しておきたい。

3♀♀, 山形県西置賜郡小国町, 9.V.2009; 7♀♀, 同地, 10.V.2009; 7♀♀, 同地, 11.V.2009; 4♀♀, 同地, 19.V.2009.

ツマグロヒラタコメツキが飛来した木は、幹の直



径が100~120cmの太いブナで、根をつけたまま完全に倒れたものであった。倒木の状態はやや朽ち木化しており、表面にはヒラタケなどのキノコがはえている様子が観察された。このような状況から、倒木は原木が倒れてから少なくとも5年は経過しているものと推測された。

観察された雌成虫は、微毛の擦れもない極めて新鮮な個体ばかりで、飛来時刻は午前10時半~12時半ぐらいに集中していた。同じ倒木には、ダイミョウコメツキ *Anostirus (Ipostirus) daimio* (LEWIS, 1894) も飛来したが、時刻は、ツマグロヒラタコメツキとは異なり、12時半以降に集中していた。

ブナの倒木に飛来した雌個体は、浮き上がった根の部分に止まり、そこについている土の中に潜り込む行動が観察された。これらの雌個体がそこに産卵する様子は残念ながら確認できなかったが、多くの雌個体が同じ倒木の根に飛来し、根についている土の中に潜り込もうとする行動をとっていたことを考えると、雌個体は産卵するために倒木の根に飛来した可能性が高いのではないかと推察される。

今回、ツマグロヒラタコメツキの飛来が観察されたブナの近くには、同様に根ごとそっくり倒れたブナの大木が2本みられたが、そちらブナではツマグロヒラタコメツキの飛来はまったく観察できなかった。倒木の状態や周りの環境に、微妙な違いがあったのかもしれないが、はっきりと分かる違いは見出せなかった。

ツマグロヒラタコメツキは、ヨーロッパの基亜種において、その幼虫がギョウリョウモドキ、カバ、ヤナギの倒木の根から観察されることから、幼虫はそれらの根を食べるのではないかと推測されている。ベルギーでの観察では、幼虫は8~9月に土壤中で蛹化し、ごく短期間で成虫となり、そのまま越冬し、翌年の4月中旬頃に成虫が野外に出現する。日本の亜種においても同様の生活史をもっている可能性もあり、今回の観察を受けて、解明が進むことを期待したい。

参考文献

- 岸井 尚・大平仁夫, 1956. 新潟県の叩頭虫, 特に馬場金太郎博士の蒐集品に就いて. *Akitsu, Kyoto*, 5(3): 71-84.
- LESEIGNEUR, L., 1972. Coléoptères Elateridae de la Faune de France Continentale et de Corse. *Bull. mens. Soc. Linn. Lyon*, 41(Suppl.). 379 pp.
- 尾崎俊寛・佐藤福男・沼田 仁・加納彦一, 2006. 秋田県のコメツキムシ. 74 pp. 秋田自然史研究会.
- 下山健作, 1979. ツマグロヒラタコメツキ♂の採集例. *Elytra, Tokyo*, 7(1): 18.

(東京都世田谷区, 鈴木 亙;
山形県米沢市, 中村 司)

五島列島で採集した海岸性甲虫類の記録

藤原 淳一・河上 康子・沼田 京子

Records on marine Coleoptera of the Goto archipelago,
Nagasaki Prefecture, Japan

Jun'ichi FUJIWARA, Yasuko KAWAKAMI and Kyoko NUMATA

五島列島は長崎県本土の西方に浮かぶ列島で、中通島、若松島、奈留島、久賀島、福江島の代表的な5島と宇久島、小値賀島などの大小の属島からなる(江島ほか, 1981)。五島列島からはゴトウミズギワゴミムシ *Bembidion gotoense* HABU やアオカナブン *Rhomborrhina unicolor fukueana* K. SAKAI などの特産種や特産亜種が知られており、生物地理学的にも興味深い列島である。

藤原と沼田は2009年8月27日から9月2日まで五島列島を訪れ、海岸性甲虫を採集した。各島における調査地点数は宇久島3地点、小値賀島4地点、中通島3地点、若松島1地点、奈留島2地点、久賀島1地点、福江島5地点の合計19地点である。調査方法は全て任意採集で、浜辺に打ち上げられた海藻や流木などの漂着物下や植生の根際を搜索した。採集した標本の同定を河上が行い9科19種を確認した。そのうち3種は長崎県において、別の4種は五島列島において初めて確認された種であった。今回筆者らが行った調査の期間は短く、調査地点や調査方法も十分ではないが、五島列島の甲虫相を解明する上で重要な情報になると考え得られた種のリストをここに報告する。

本文に入るに先立ち、五島列島の甲虫に関する文献や記録についてご教示頂いた今坂正一氏、中園洋行氏、標本写真の撮影のご指導を賜った前藤 薫教授に厚くお礼申し上げます。

調査地点

下記の19地点で調査を行った(図1)。その内12地点で海岸性甲虫を採集した(図1中の●印)。調査地点は砂浜または礫浜で、岩礁や磯は含まれていない。調査地点の略称、島名、地名、3次メッシュコードを記述する。なお、略称と共に記した記号(A)から(S)は図1の記号と一致している。

- 大 浜 (A); 宇久島 佐世保市宇久町平 大浜海水浴場(MC: 49297131)
- スゲ浜 (B); 宇久島 佐世保市宇久町平 スゲ浜海水浴場(MC: 49297111)
- 汐出浜 (C); 宇久島 佐世保市宇久町本飯良 汐出浜海水浴場(MC: 49297016)
- 柿ノ浜 (D); 小値賀島 北松浦郡小値賀町柳郷 柿ノ浜海水浴場(MC: 49296054)
- 白 浜 (E); 小値賀島 北松浦郡小値賀町津津郷 白浜海水浴場(MC: 49296043)
- 赤 浜 (F); 小値賀島 北松浦郡小値賀町前方郷 赤浜海岸(MC: 49296026)
- 船 瀬 (G); 小値賀島 北松浦郡小値賀町中村郷 船瀬海水浴場(MC: 49296035)
- 船 崎 (H); 中通島 南松浦郡新上五島町船崎郷 船崎海水浴場(MC: 49293093)
- 蛤 浜 (I); 中通島 南松浦郡新上五島町七日郷 蛤浜海水浴場(MC: 49293078)
- 高井旅 (J); 中通島 南松浦郡新上五島町奈良尾郷 高井旅海水浴場(MC: 49292035)
- 堤 (K); 若松島 南松浦郡新上五島町間伏郷

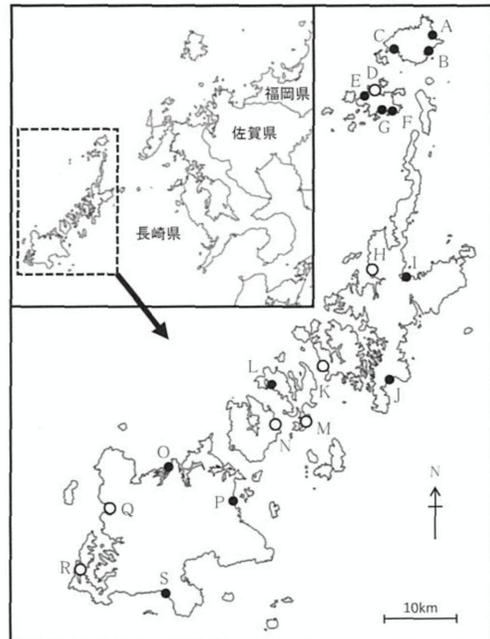


図1. 五島列島と九州本土の位置関係と五島列島における調査地点。●印は海岸性甲虫を確認した地点、○印は確認できなかった地点を示している。調査地点の地名は本文中に記述した。

堤海水浴場 (MC: 49282757)

- 江上(L); 奈留島 五島市奈留町大串 (MC: 49282722)
 舅ヶ島(M); 奈留島 五島市奈留町泊 舅ヶ島海水浴場 (MC: 49281775)
 五輪(N); 久賀島 五島市蕨町五輪 (MC: 49281762)
 浜田(O); 福江島 長崎県五島市岐宿町岐宿 浜田海水浴場 (MC: 49281600)
 六方(P); 福江島 長崎県五島市平蔵町 六方海水浴場 (MC: 49280657)
 高浜(Q); 福江島 長崎県五島市三井楽町貝津 高浜海水浴場 (MC: 49280552)
 小浦(R); 福江島 長崎県五島市玉之浦町小浦 小浦海水浴場 (MC: 48287479)
 黒瀬(S); 福江島 長崎県五島市富江町黒瀬 (MC: 48287529)

採集記録

分類群ごとに今回得られた種の記録を記述する。地点名には略称を用いた。採集者名は記号を用いた (F: 藤原, N: 沼田)。*は五島列島初記録を, **は長崎県初記録を示し, 標本写真を図2に示した。標本はすべて乾燥標本とし, 基本的に藤原が保管しているが, その一部は河上が保管している。

オサムシ科 Carabidae

ヒョウタンゴミムシ *Scarites aterrimus* MORAWITZ

1 ex., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, N; 1 ex., 白浜 (E), 28. VIII. 2009, N; 1 ex., 赤浜 (F), 28. VIII. 2009, F; 1 ex., 船瀬 (G), 28. VIII. 2009, F; 1 ex., 蛤浜 (I), 29. VIII. 2009, F

ガムシ科 Hydrophilidae

コケシガムシ *Cercyon aptus* SHARP

1 ex., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, F; 1 ex., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, N; 6 exs., 浜田 (O), 1. IX. 2009, F&N

フチトリケシガムシ *Cercyon dux* SHARP

1 ex., 江上 (L), 31. VIII. 2009, F; 5 exs., 浜田 (O), 1. IX. 2009, F&N

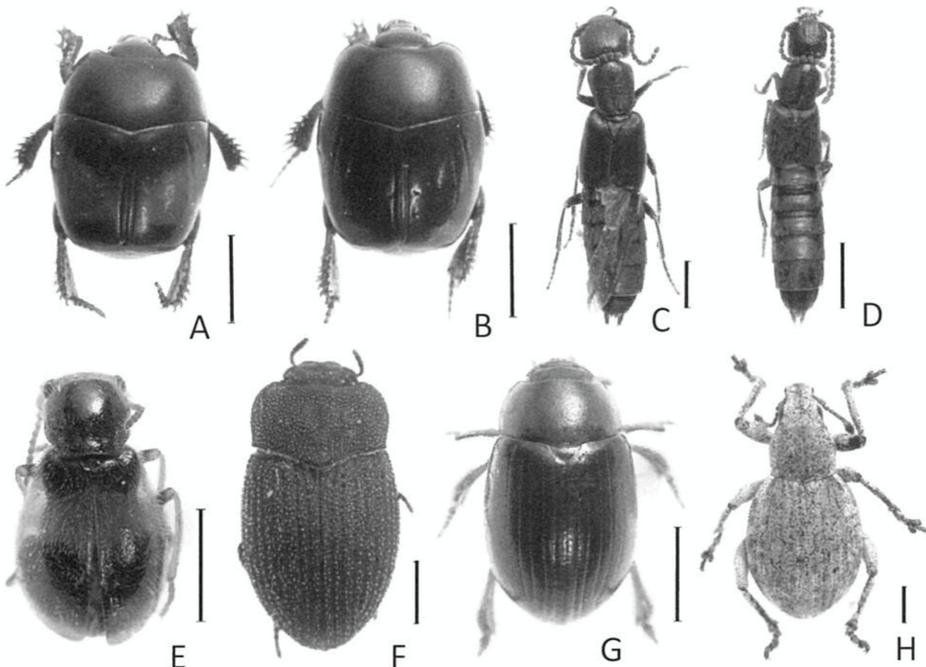


図2. 五島列島で採集した海岸性甲虫。A, ツヤハマベエンマムシ; B, ツヤハマベエンマムシ (黒化型); C, ホソアバタウミベハネカクシ; D, ホソウミベハネカクシ; E, クロキオビジョウカイモドキ; F, マルチビゴミムシダマシ; G, ニセマグソコガネダマシ; H, スナムグリヒョウタンゾウムシ。スケールはすべて1mm。拡大率は任意。

エンマムシ科 Histeridaeツヤハマベエンマムシ* *Eopachylopus ripae* (LEWIS)

2 exs., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, N

ハマベエンマムシ *Hypocaccus varians* (SCHMIDT)

4 exs., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, N

ハネカクシ科 Staphylinidaeアバタウミベハネカクシ *Cafius vestitus* (SHARP)

3 exs., 白浜 (E), 28. VIII. 2009, F&N; 1 ex., 赤浜 (F), 28. VIII. 2009, N; 3 exs., 浜田 (O), 1. IX. 2009, F&N

ホソアバタウミベハネカクシ* *Cafius histrio* (SHARP)

2 exs., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, F; 1 ex., 船瀬 (G), 28. VIII. 2009, F

アカウミベハネカクシ *Cafius rufescens* SHARP

14 exs., スゲ浜 (B), 27. VIII. 2009, F&N; 1 ex., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, N; 4 exs., 白浜 (E), 28. VIII. 2009, F&N; 1 ex., 蛤浜 (I), 29. VIII. 2009, F; 6 exs., 浜田 (O), 1. IX. 2009, F&N; 2 exs., 六方 (P), 31. VIII. 2009, F;

4 exs., 黒瀬 (S), 2. IX. 2009, F

ホソウミベハネカクシ* *Cafius algarum* SHARP

3 exs., 浜田 (O), 1. IX. 2009, F&N

ウミベアカバハネカクシ *Phucobius simulator* SHARP

6 exs., 蛤浜 (I), 29. VIII. 2009, F

Atheta sp.本種は林・河上 (2007) で記録されている *Atheta* sp. 1 と同一種である。

7 exs., 江上 (L), 31. VIII. 2009, F&N; 2 exs., 六方 (P), 31. VIII. 2009, F

コガネムシ科 Scarabaeidaeヤマトケシマガソコガネ *Psammodius japonicus* HAROLD

2 exs., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, N

コメツキムシ科 Elateridaeアカアシコハナコメツキ *Paracardiophorus sequens* (CANDÈZE)

12 exs., スゲ浜 (B), 27. VIII. 2009, F; 1 ex., 高井旅 (J), 29. VIII. 2009, F

ジョウカイモドキ科 Melyridaeクロキオビジョウカイモドキ** *Laius niponicus* LEWIS

1 ex., スゲ浜 (B), 27. VIII. 2009, F

ゴミムシダマシ科 Tenebrionidaeハマヒョウタンゴムシダマシ *Idisia ornata* PASCOE

6 exs., スゲ浜 (B), 27. VIII. 2009, F; 5 exs., 高井旅 (J), 29. VIII. 2009, F

オオマルスナゴムシダマシ *Phelopatrum scaphoides* (MARSEUL)

2 exs., 大浜 (A), 27. VIII. 2009, N; 8 exs., スゲ浜 (B), 27. VIII. 2009, F; 1 ex., 汐出浜 (C), 27. VIII. 2009, F; 1 ex., 蛤浜 (I), 29. VIII. 2009, F

マルチビゴムシダマシ* *Caedius marinus* MARSEUL

59 exs., 高井旅 (J), 29. VIII. 2009, F

ニセマガソコガネダマシ** *Trachyscelis sabuleti* LEWIS

1 ex., スゲ浜 (B), 27. VIII. 2009, F

ゾウムシ科 Curculionidaeスナムグリヒョウタンゾウムシ** *Scepticus tigrinus* (ROELOFS)

31 exs., スゲ浜 (B), 27. VIII. 2009, F

文 献

- 江島正郎・古川雅通・後藤安一郎・市場利哉・今坂正一・池崎善博・岸田泰則・中山博彦・緒方一夫・志方比呂基・高橋篤美・浦田明夫・吉田喜美明, 1981. 五島列島産昆虫目録. 五島の生物, 247-324.
- 河上康子・林 成多, 2007. 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究 (2) 島根半島. ホシザキグリーン財団研究報告, (10): 37-76.

今坂正一・青木良夫・池崎善博・楠井善久・日下部良康・桃下 大・野田正美・田中 清・長崎北陽台高校生物部(長崎昆虫同好会甲虫会グループ), 1994a. 五島列島において1982年から1994年に新たに採集と報告された甲虫(1). 長崎県生物学会誌, (44): 59-76.

今坂正一・青木良夫・池崎善博・楠井善久・日下部良康・桃下 大・野田正美・田中 清・長崎北陽台高校生物部(長崎昆虫同好会甲虫会グループ), 1994b. 五島列島において1982年から1994年に新たに採集と報告された甲虫(2). 長崎県生物学会誌, (44): 77-94.

今坂正一・江島正郎・志方比呂基, 1981. 五島列島産昆虫目録〔追補〕. 五島の生物, 325-332.

(藤原: 神戸大学大学院昆虫機能学研究室)

(河上: 大阪府高槻市寿町)

(沼田: 島根大学大学院生物機能学研究室)

○西表島に侵入したシバオサゾウムシ

シバオサゾウムシ *Sphenophorus venatus vestitus* CHITTENDEN, 1904 は別名 Zoysiagrass billbug と呼ばれ、ノシバ属 *Zoysia* の害虫として知られるオサゾウムシ科オサゾウムシ族の一種である。本種には5亜種が記録されており、この内日本に侵入したのは北アメリカ東南部に分布する亜種であることが判明している(森本, 1984, 1988)。国内においては1979年に沖縄県玉城村のゴルフ場で初めて発見された後も分布拡大を続け、現在は本州、九州、琉球(沖縄本島)から知られている(MORIMOTO, 1985; 森本, 1988; 青柳ほか, 1990)。

筆者らは本亜種をこれまで記録の無い西表島で採集しているため、本邦における分布西限記録として報告しておきたい。

1♂1♀, 20頭, 沖縄県八重山郡竹富町豊原(西表島), 4.IV.2009, 山本周平・伊藤玲央採集。(この

内2頭は森本桂博士によって同定確認済み)

採集された環境は人工的に植栽されたシバの草地である。筆者らは採集個体以外にも多数を目撃しており、中には交尾中のもも見られたことから、当地で繁殖している可能性が極めて高いものと考えられる。シバオサゾウムシは植栽されるシバに混じって移入される場合が多いので、第一筆者は植栽されたシバの種類や植栽経路などを調査してみたが、残念なことに詳細は明らかにならなかった。しかしながら、西表島においてはシバを植栽(栽培)している地域が非常に限定的であることから、おそらく西表島以外から持ち込まれたシバであるものと思われる。

それ故、今後本亜種が島内で爆発的に増加することは考えにくいのではないだろうか。いずれにせよ、当面の間は当地における本亜種の動向を注視していくと共に、関係者諸氏に注意を喚起したい。

末筆になるが、本種の同定確認と本報の校閲を下さった森本桂博士(九州大学名誉教授)に謝意を表す。

参考文献

- 青柳正人・石井 実・広渡俊哉・保田淑郎, 1990. 大和川河川敷におけるシバオサゾウムシの発見. 日本応用動物学会会誌(応動昆), 34(3): 253-254.
- 森本 桂, 1984. オサゾウムシ科. 林匡夫ほか, 原色日本甲虫図鑑, (IV), pp. 345-347, pls. 68. 保育社, 大阪.
- MORIMOTO, K., 1985. Supplement to the check-list of the family Rhynchophoridae (Coleoptera) of Japan, with description of a new genus and four new species. *ESAKIA*, 23: 67-76.
- 森本 桂, 1988. 日本へ侵入したゾウムシ類の見分け方と被害. 農業研究, 35(1): 28-44.

(九州大学農学部, 山本周平・伊藤玲央)



アカガネエグリタマムシの徳之島における記録

栗原 隆・一柳 考志

The record of *Endelus pyrrrosiae* KUROSAWA (Buprestidae, Agrilinae) from Tokunoshima Island, Kagoshima, Japan

Takashi KURIHARA and Koushi ICHIYANAGI

タマムシ科ナガタマムシ亜科に属するアカガネエグリタマムシ *Endelus pyrrrosiae* KUROSAWA, 1985 は、本州の岐阜県以西、淡路島、四国、九州および奄美大島から記録されており、奄美大島産の個体は亜種 *aokii* KUROSAWA, 1985 とされる(秋山・大桃, 2000)。本種はヒトツバを寄主植物とすることが知られているが、木元(2005)は現在の東限の記録となる福島県阿武隈山地よりノキシノブから本種を採集し、報告している。

奄美大島に産する亜種 *aokii* の記録は原記載以降ほとんど見当たらず、非常に稀なようである。筆者らは2009年3月に徳之島へ訪れた際、幸運にも本亜種と思われる個体を採集することができたので報告する。なお、本報告が徳之島における本種の初記録と思われる。

2 exs., Mt. Amagi, alt. 500~530 m, Tokunoshima Town, Is. Tokunoshima, 16. III, 2009, T. KURIHARA leg.; 1 ex., 同, 18. III, 2009, T. KURIHARA leg. (栗原所蔵)。

採集地は良好な天然林が残っている徳之島北部の天城岳山頂付近で、周辺には樹幹に着生したヒトツバを含むシダ類が非常に多く見られた。最初に採集された個体は、登山道沿いの立ち枯れで朽ち木に見られるゴミムシダマシなどの甲虫を採集中に、偶然、ピーティングネットの上に落ちたもので、その後、その立ち枯れに着生したヒトツバより1頭を追加した(写真1)。二日後に再度訪れた際は、採集された地点から前後20mほどのヒトツバを手当たり次第に調べたが、生木に着生したヒトツバから1頭を採集するにとどまった。

黒沢・遠山(1985)によると、奄美大島産の亜種 *aokii* は「鮫肌状が弱く、光沢が強く、前胸背板側縁が中央で最広で前方の湾曲が弱い」ことで基準亜種と区別される。今回得られた3頭について検討した結果、上翅の

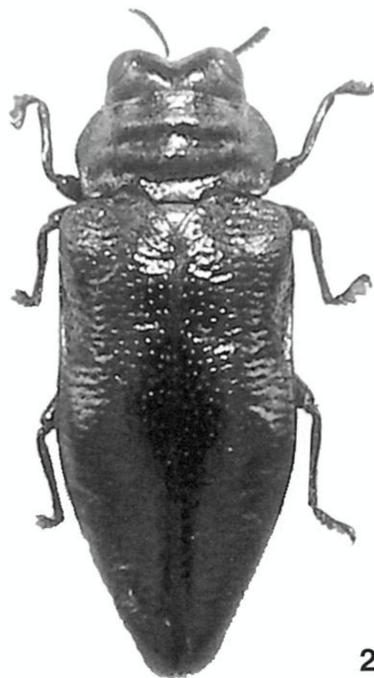


写真1. アカガネエグリタマムシが採集されたヒトツバ。
写真2. 徳之島産アカガネエグリタマムシ。

鮫肌状は変異があるものの、比較に用いた岐阜県産の個体と比べ明らかに弱く、点刻がより浅く疎らで、光沢も強いことが確認された。また、前胸背板の最広部は徳之島の個体で2頭が中央よりやや前方に位置し、1頭がほぼ中央部であった。したがって、亜種の識別点とされるそれらの形質はやや不安定であるものの(写真2)、実際に両亜種を比較することで区別できることから、今回得られた徳之島産を *E. pyrrrosiae aoki* KUROSAWA と同定した。

末筆ながら、本種の本州産比較標本を提供いただき、また本種のさまざまな情報をご教授頂いた石黒昌貴氏、この採集旅行の機会を与えていただいた安藤清志博士、林靖彦氏ならびに木村史明氏に心より厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 秋山黄洋・大桃定洋, 2000. 日本産タマムシ大図鑑. 341 pp., むし社, 東京.
木元達之助, 2005. 阿武隈山地でアカガネエグリタマムシを採集. 甲虫ニュース, (152): 13.
黒沢良彦・遠山雅夫, 1985. タマムシ科. 原色日本甲虫図鑑, (3): 2-39. 保育社, 大阪.

(栗原: 農業環境技術研究所)
(一柳: 愛媛大学農学部)

○茨城県におけるヒサゴコフキゾウムシの採集例

ヒサゴコフキゾウムシ *Sitona (Sitona) aberrans* FAUST, 1887 (= *Parasitones gravidus* SHARP, 1896) は、ゾウムシ科クチブトゾウムシ亜科コフキゾウムシ族に属し、ロシア沿海州(模式産地: Wladiwastok)および韓国(含済州島)、日本(本州)に分布することが知られている(森本, 1984; HONG *et al.*, 2000). 本種の生態的知見は乏しいが、宮城県仙台市では二次的な草地に生息し、成虫がヤブマメ(マメ科)を食害することが報告されている(吉武, 1998). 日本において、本種は非常に稀で、全国的に記録が少ない(森本, 1984).

最近、筆者は茨城県産の本種の標本を検査する機会に恵まれた。日本国内における本種の分布を知る上

で重要な記録と思われるので、ここに報告する。

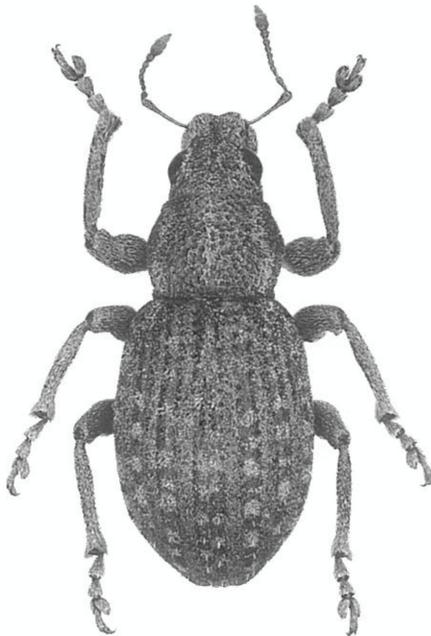
1頭、茨城県稲敷郡阿見町小池, 28. vii. 2009, 吉武 啓採集・保管(写真).

本個体は水田と雑木林の間にある草地のピーティンクによって得られたものである。なお、茨城県産甲虫リストおよびその補遺(高野・大桃, 2000; 高野・大桃, 2005; 高野・大桃, 2008)に本種は掲載されていないことから、同県初記録と思われる。

引用文献

- FAUST, J., 1887. Curculioniden aus dem Amur-Gebiet. *Deut. Ent. Zeit.*, 31: 168.
HONG, K. J., A. B. EGOROV & B. A. KOROTYAEV, 2000. Illustrated catalogue of Curculionidae in Korea (Coleoptera). In: *Insects of Korea* (Park K. T., ed.), 5. 337 pp. Korea Research Institute of Bioscience and Biotechnology & Center for Insect Systematics, Korea.
森本 桂, 1984. ゾウムシ科. 林 匡夫, 森本 桂, 木元新作編著, 原色日本甲虫図鑑, IV: pp. 269-345 [incl. pls. 53-68]. 保育社, 大阪.
SHARP, D., 1896. The Rhynchophorous Coleoptera of Japan. Part IV. Otiorynchidae and Sitonides, and a genus of doubtful position from the Kurile Islands. *Trans. Ent. Soc. Lond.*, 1896: 81-115.
高野 勉・大桃定洋, 2000. 茨城県産甲虫リスト. りぼし, (23): 1-156.
高野 勉・大桃定洋, 2005. 茨城県産甲虫リスト補遺(1). りぼし, (32): 35-61.
高野 勉・大桃定洋, 2008. 茨城県産甲虫リスト補遺(2). りぼし, (36): 18-37.
吉武 啓, 1998. ヒサゴコフキゾウムシの追加記録. 甲虫ニュース, (123): 7.

(農業環境技術研究所, 吉武 啓)



長崎県壱岐市の芦辺層群八幡累層から産出した鮮新世の甲虫化石

林 成多・八尋克郎・北林栄一

Pliocene fossil beetles from the Yahata Formation of Ashibe Group in Iki City, Nagasaki Prefecture, Japan

Masakazu HAYASHI, Katsuro YAHIRO and Eiichi KITABAYASHI

はじめに

長崎県壱岐市(旧壱岐郡)芦辺町の八幡半島北岸には、棚江原泥・亜炭層(壱岐団研, 1973)とよばれる鮮新世の堆積物が分布している。この地層からは、これまでに大型植物化石(MIKI and KOKAWA, 1962; 石田ほか, 1970)の産出が報告されている。昆虫化石については、石田ほか(1970)によって産出にふれられているが、詳細な報告例はなかった。このたび、筆者のひとり北林によって棚江原泥・亜炭層から甲虫類の化石が採集されたので報告する。

産出層準と産出場所

長崎県壱岐市(旧壱岐郡)芦辺町の八幡半島北岸には、玄武岩質溶岩が分布し、泥炭や砂礫をふくむ泥質堆積物が挟まれている。壱岐団研(1973)は、この堆積物を芦辺層群八幡累層棚江原泥・亜炭層とよんだ。棚江原泥・亜炭層の堆積した時代は火山層序、および玄武岩質溶岩のK-Ar年代から鮮新世と考えられている(竹下ほか, 1987; 佐野, 1995)。

甲虫化石を産出したのは、長崎県壱岐市芦辺町諸吉本村触の棚江原の海岸である(北緯33度47分14秒, 東経129度47分27秒)。化石産出地点の柱状図を図1に示す。

棚江原泥・亜炭層は泥炭や砂礫を含む泥質堆積物からなり、層厚約3m、玄武岩質溶岩に挟まれる。最下部は層厚約0.4mの炭質泥岩で、タマネギ状構造の見られる風化した玄武岩質溶岩を不整合に覆う。炭質泥岩には、風化した玄武岩の礫が多く含まれる。その上は層厚約1.6mの材片の密集する泥炭と炭質泥岩の互層で、材片には金属鉱物の析出が見られる。その上には層厚約1mの砂礫まじりのシルト層があり、材片や骨片が含まれる。シルト層は上位の玄武岩質溶岩におおわれる。甲虫化石は、棚江原泥・亜炭層の最下部の風化した玄武岩の礫を含む炭質泥岩から散在的に産出した。

産出した甲虫化石

産出した化石の一覧を表1に示す。産出した化石のほとんどは保存状態が悪く、科レベルでの同定が困難であった。科レベルでは、オサムシ科が15点、ガムシ科が3点、コガネムシ科が1点、ハムシ科が16点である。

種レベルでは、ヒメヒョウタンゴミムシ? *Clivina niponensis* BATES? が同定された(図2A)。標本は保存の良い前胸背板の化石が1点である。長さ1.1mm、幅1.1mm; 全体に黒色で金属光沢がある; 前縁は幅広い切断状で、側縁は弧状で後方へ向かって狭まり、基部は狭い切断状; 両側縁は縁取られ; 中央に縦溝がある。大きさも含め、現生種のヒメヒョウタンゴミムシの特徴とほぼ一致し、同一種か近縁な種であるとみられる。

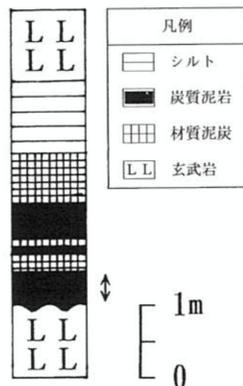


図1. 化石産地の柱状図。矢印の範囲が甲虫化石の産出層準。

表1. 八幡累層から産出した甲虫化石

ヒメヒョウタンゴミムシ? <i>Clivina niponensis</i> BATES?	1
ナガゴミムシ亜科(属種不明) Pterostichinae gen. et sp. indet.	1
トックリゴミムシ族(属種不明) Oodini gen. et sp. indet.	2
オサムシ科ゴミムシ類(亜科不明) Carabidae gen. et sp. indet.	11
セマルガムシ属の一種 <i>Coelostma</i> sp.	2
ガムシ科(属種不明) Hydrophilidae gen. et sp. indet.	1
エンマコガネ類 <i>Caccobius/Onthophagus</i>	1
ミズクサハムシ属 <i>Plateumaris</i> sp.	6
ネクイハムシ亜科 Donaciinae gen. et sp. indet.	8
ハムシ科(属種不明) Chrysomelidae gen. et sp. indet.	2
ゾウムシ科(属種不明) Curculionidae gen. et sp. indet.	2
科不明甲虫類 Coleoptera fam., gen. et sp. indet.	137
合計点数	174

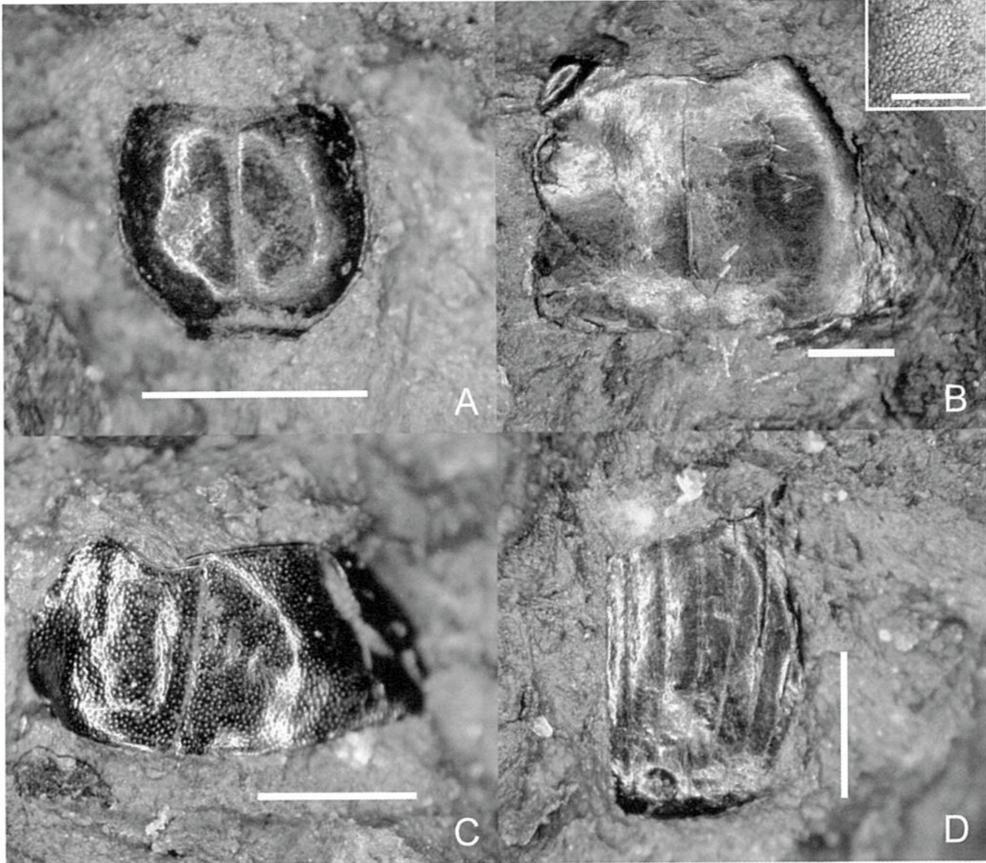


図2. 八幡累層産の甲虫化石。A, ヒメヒョウタンゴミムシ?, 前胸背板; B, トックリゴミムシ族, 前胸背板(右上は表面の微細印刻: スケール0.1 mm); C, セマルガムシ属, 前胸背板; D, エンマコガネ類, 右上翅。スケールは1 mm。

このほか、トックリゴミムシ族の前胸背板(図2B)や、セマルガムシ属の前胸背板(図2C)、エンマコガネ類の上翅(図2D)、ミズクサハムシ属の上翅などが同定されたが、保存状態が悪いことや産出部位が限られることから、種レベルでの検討は困難だった。

産出した甲虫化石群集の構成は、ゴミムシ類とネクイハムシ類が多く、一般的な泥炭質堆積物から産出する甲虫化石群集と特徴がよく似ていた。セマルガムシ属やミズクサハムシ属などの水生甲虫や、ヒメヒョウタンゴミムシ? やトックリゴミムシ類など湿地に生息する地表性甲虫が同定されていることから、化石産出層準の炭質泥岩層が淡水域の湿地で堆積したことを示している。

文 献

- 宍岐団体研究会, 1973. 宍岐島の地質—とくに中新統宍岐層群について—, 地質学論集, (9): 69-81.
 石田志朗・藤山家徳・林 徳衛・野口寧世・友田淑郎, 1970. 宍岐長者原珪藻土層とその化石. 国立科学博物館専報, (3): 49-63.
 Miki, S. and S. KOKAWA, 1962. Late Cenozoic Floras of Kyushu, Japan. *Journal of Biology Osaka City University*, 13: 65-86.
 佐野貴司, 1995. 宍岐火山群の地質: 主に K-Ar 年代に基づく溶岩流層序. 火山, 40(4): 329-347.
 竹下 壽・林 茂・浦川虎郷・山内正志・田島俊彦・宍岐団研, 1987. 宍岐島の火山層序. 地団研専報, (33): 21-52.

(林: ホシザキグリーン財団)

(八尋: 滋賀県立琵琶湖博物館)

(北林: 玖珠町立北山田中学校)

○十勝支庁上士幌町におけるアリヅカムシ3種の記録

十勝支庁上士幌町は、自然度の高い大規模な針葉樹林や北海道有数の高山を擁し、日本屈指の甲虫の宝庫として知られている。しかし同町におけるアリヅカムシの記録は少なく、筆者が調査した限りでは、三股から *Basitrodes vestitus* (SHARP) チュウゼンジツノアリヅカムシ (NOMURA, 2003), 上川町との町境である三国峠から *Batrisodes galloisi* JEANNEL ガロアオニアリヅカムシ (野村, 2007) の、計2種が記録されているにすぎない。筆者が、手元にあった上士幌町内産のアリヅカムシ3種の標本を野村周平博士に同定していただいたところ、1種はガロアオニで、残る2種は北海道初記録と国内での北限記録に該当する種であることが判明したので、ここに記録する。

Batrisodes (Batrisodes) galloisi JEANNEL ガロアオニアリヅカムシ

本種の記載命名および分布解明の経緯については、野村(2007)により、詳しく解説されている。北海道、栃木県、東京都、岐阜県から記録されている。北海道の記録は堀繁久氏によって、三国峠からトラック・トラップ(カーネット)によって得られたものである。なお、野村(2007)は三国峠の所在地を「上川・幌加内町」と記載しているが、上川町と幌加内町は隣接しては無く、一方で堀(2003)は、三国峠をはさんで上川町大雪湖付近と上士幌町三股の間でトラック・トラップを行なったことを報告している。従って、野村(2007)が記録した個体の採集地「三国峠」は、上川・上士幌町境の三国峠のことであると考えられる。

〈採集データ〉1♂, 北海道上士幌町上士幌駅跡土場(エゾマツまたはトドマツ材切口のヤニに付着) 25. v.-2. vi. 1989, 芳賀馨採集, 野村周平保管。この個体は、芳賀(1993)が「アリヅカムシ科 Gen. sp.」として報告した個体である。

Rybaxis pinguis KURBATOV ペンギンダイコクアリヅカムシ

ロシア沿海州から記載された種で、わが国からは、NOMURA(2005)によって、大分県から報じられた。その後、野村・新井(2008)が埼玉県庄和町(現春日部市)新宿新田の江戸川河川敷から記録、図示した。その際には本種の命名者を LÖBL としているが、KURBATOV が正しい。北海道からは初記録となる。〈採集データ〉1♂, 北海道上士幌町東居辺, 小学校下流居辺川右岸のミズナラ等二次林内(枯木の叩き網), 27. vi. 2007, 芳賀馨採集, 野村周平保管。

Tmesiphorus princeps SHARP (和名なし)

クサアリ類(*Lasius* 属 *Dendrolasius* 亜属)の行列や巢中に見られる好蟻性のアリヅカムシである。新潟県湯沢町二居²²から George LEWIS によって採集され、David SHARP によって記載された。その後、東京都内や神奈川県からも採集されている(ハネカクシ談話会ウェブサイトによる)。北海道からは渡

島大島から、西島・早川(1997)が記録しているが、下記上士幌町の記録は北限記録となる。

〈採集データ〉1♂, 北海道上士幌町十勝三股, 5. viii. 1985, 亀澤洋採集, 野村周平保管。

末筆ながら、標本の同定のみならず各種の分布や生態について詳細にご教示くださり発表を勧められた野村周平博士(国立科学博物館)と、貴重な標本を恵与された亀澤洋氏(東京都目黒区)に心からお礼申しあげる。

引用文献

- 芳賀 馨, 1993. 上士幌町上士幌駅跡土場で採集された甲虫。上士幌町ひがし大雪博物館研究報告, (15): 1-39.
堀 繁久, 2003. トラックトラップによる飛翔甲虫調査。 *jezoensis*, (29): 26-30.
NOMURA, S., 2003. A taxonomic revision of the genus *Basitrodes* (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae). Part 2. *Basitrodes vestitus* group. *Elytra, Tokyo*, 31: 175-183.
NOMURA, S., 2005. Records and notes on three little-known species of the tribe Brachyglutini (Coleoptera, Staphylinidae, Pselaphinae) from Japan. *Elytra, Tokyo*, 33: 267-268.
西島 浩・早川博文, 1997. 第6章. 昆虫類総合調査. 大島漁港建設に伴う環境調査報告書, 北海道開発局函館開発建設部, pp. 111-135.
野村周平, 2007. 渋谷のアリヅカムシ. 甲虫ニュース, (160): 7-9.
野村周平・新井志保, 2008. アリヅカムシの採集と生息環境 2. 埼玉県庄和町の採集例. 月刊むし, (451): 5-8. (埼玉県さいたま市, 芳賀 馨)

○ムネクボスジホソカタムシを長野県で採集

ムネクボスジホソカタムシ *Ascetoderes takeii* (NAKANE, 1968) は、群馬県沼田産の標本をもとに記載されたムネヒゲホソカタムシ科の甲虫である。

生川・田中(2004)は、和歌山県高野山からこの種を記録したが、これは青木(2009)によると別の種で、真の *takeii* は、原記載以来記録がないという。

筆者はこの種を長野県で採集しているので報告しておきたい。

1頭, 長野県川上村原(標高1,200 m), 22. VII. 2002, 筆者採集保管。

畑地と広葉樹二次林に囲まれた小規模な土場で、伐採後2~3年を経たと思われる直径40cmほどのコナラ洞中に堆積した朽ち木片中から採集した。

参考文献

- 青木淳一, 2009. ホソカタムシの誘惑. iv+194 pp. 東海大学出版会。
NAKANE, T., 1968. New or little-known Coleoptera from Japan and its adjacent area. XXVI. Cucujoidea. *Frag. Coleopt.*, (19): 73-76.
生川展行・田中 勇, 2004. 興味深いムネヒゲホソカタムシ3種の記録. *ねじればね*, (109): 19-20.
佐々治寛之, 1985. ホソカタムシ科. 黒沢・久松・佐々治(編): 原色日本甲虫図鑑(III): 291-295 (pl. 48). 保育社。(三重県津市, 秋田勝己)

○ブランクッチコパネジョウカイの追加記録

ブランクッチコパネジョウカイ *Tryptherus atratulus* BRANCUCCI は岐阜県中津川を基準産地として記載され、北海道および本州に分布することが報告されている (BRANCUCCI, 1985). それ以後、高橋 (1992) や桐山 (1995) などによる追加記録が報告されているもの、記録は少ない。今回本種標本を検査することができたので分布記録として報告しておく。



1♂1♀、北海道足寄町喜登牛 (標高 300 m), 7. VII. 2001, 井上広光採集; 1♂, 福島県下郷町中妻〜田島町折橋, 26. V. 1999 (倉敷市自博蔵); 1♂, 山梨県塩山市嵯峨塩, 7. VI. 1997, 栗原隆採集 (倉敷市自博蔵); 1♀, 長野県大桑村伊奈川ダム (灯火), 2. VII. 1996, 筆者採集; 1♀, 岐阜県中津川市黒井沢, 13. VI. 1987, 森本桂採集。

BRANCUCCI (1985, fig. 54) に図示されている本種雌個体の腹部第8背板 (腹面図) は末端がやや角張ったずんぐりした外形であるが、今回検視した標本ではいずれも高橋 (1992, fig. 106) に示されたような、ややほっそりした外形が認められた。

末筆ながら、所蔵標本の検討と発表をお許しただくとともに基準標本の調査について便宜を計らっていただいた倉敷市立自然史博物館の奥島雄一博士、ならびに貴重な標本をご恵与いただいた森本桂・井上広光両博士に御礼申し上げます。

引用文献

- BRANCUCCI, M., 1985. Révision du genre *Tryptherus* LÉCONTE. *Ent. basil.*, 10: 251-322.
 桐山 功, 1995. 岐阜県産ジョウカイボン科甲虫の記録 (1). 啓蟄, 13(35): 1-10.
 高橋和弘, 1992. 神奈川県産のジョウカイボン科. 神奈川虫報, (100): 71-124. (九州大学, 高橋直樹)

○長崎県におけるエゾケンシガムシの記録

エゾケンシガムシ *Cercyon (Cercyon) numerosus* SHATROVSKIY は海岸に生息する陸生ガムシである。これまで、確実な生息域として北海道、千島列島と隠岐諸島島後が知られていた (ÔHARA and JIA, 2006; ÔHARA, 2008; ÔHARA and FUJIWARA, 2009). また、SHATROVSKIY (1992) は Misaki, Kyushu から本種を記録しているが、それが指す場所は不明であり九州における正確な生息地は今のところ知られていない。筆者らは長崎県西海市において本種を得たので報告する。

2♂♂, 長崎県西海市西海町太田和郷, 4. VII. 2009, 沼田採集 (藤原保管)

今回の採集記録より、これまで主に北方に生息すると思われていた種が、九州にも分布していることが確認された。エゾケンシガムシに近縁で外部形態が酷似しているフチトリケンシガムシ *Cercyon (Cercyon) dux* SHARP は北海道から九州まで広域に分布する。そのため、海岸に生息する大型種の同定を行う際は中胸腹板突起の形状や交尾器を検討する必要がある。

末筆ながら、大原昌宏博士には文献の教示や本稿の校閲など多くのご指導を賜り、発表を勧めていただいた。河上康子氏、端山 武氏にはエゾケンシガムシの同定に関して助言をいただいた。厚くお礼申し上げます。

文 献

- ÔHARA, M., 2008. New records of the supralittoral species of the genus *Cercyon* (Coleoptera, Hydrophilidae) from the peripheral islands off Hokkaido, Japan. *Elytra*, 36(2): 343-348.
 ÔHARA, M. and J. FUJIWARA, 2009. New distributional record of *Cercyon (Cercyon) numerosus* (Coleoptera, Hydrophilidae) from Oki islands off northwestern Honshu, Japan. *Elytra*, 37(1): 141-142.
 ÔHARA, M. and F. JIA, 2006. Terrestrial hydrophilid beetles of the Kuril Archipelago (Coleoptera, Hydrophilidae). *Biodiversity and Biogeography of the Kuril Islands and Sakhalin*, 2: 129-150.
 SHATROVSKIY [as "SHATROVSKIJ"], 1992. Novye i maloizvestnye vodolyubovye (Coleoptera, Hydrophiloidae) iz yuzhnogo Primor'ya i soprodel'nykh territorii. (New and little known Hydrophiloidae (Coleoptera) from southern Primorye territory and adjacent regions). *Ent. Oboz.*, 71: 359-371.

(神戸大学大学院昆虫機能学研究室, 藤原淳一)
 (島根大学大学院生物生命科学生物機能学研究室, 沼田京子)

日本におけるオオカツオゾウムシ（コウチュウ目：ゾウムシ科）の
寄主植物について

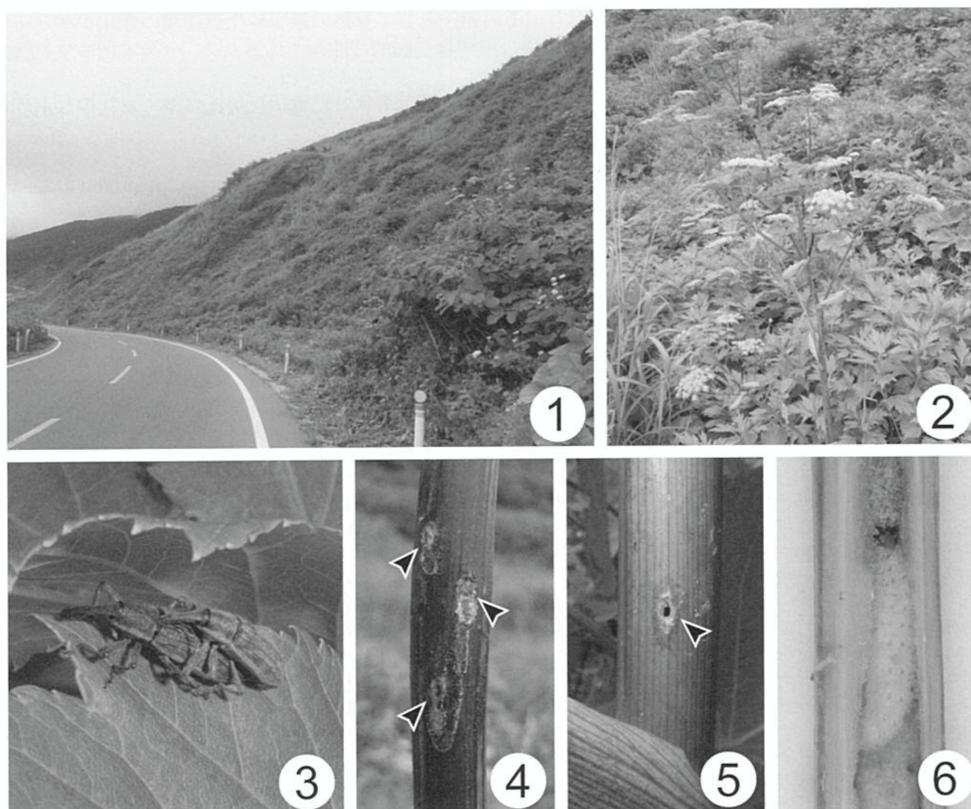
吉 武 啓

New Host Plant Record for *Lixus divaricatus* MOTSCHULSKY
(Coleoptera: Curculionidae) in Japan

Hiraku YOSHITAKE

ゾウムシ科カツオゾウムシ亜科に属するオオカツオゾウムシ *Lixus divaricatus* MOTSCHULSKY, 1860 は、極東ロシアおよび中国東北部、朝鮮半島、千島列島、北海道、本州に分布する種である。体長 2 cm に達する本種は、日本産ゾウムシ科の中で最大級の種である。

海外では、本種がセリ科のセンキュウ *Cnidium officinale* やシシウド属植物 *Angelica* spp., ウコギ科のウド *Aralia continentalis* などを加害し、幼虫が茎に穿孔することが知られている (EGOROV *et al.*, 1996; HONG *et al.*, 2000). 日本での関連植物は長い間不明であったが、堀川 (2000) は青森県小泊村と三厩村（現在の中泊町と外ヶ浜町）の数地点で本種を観察し、成虫がオオハナウド *Heracleum lanatum* var. *lanatum* (セリ科) に集ま



Figs. 1-6. *Lixus divaricatus* MOTSCHULSKY. 1. Habitat in Nakadomari, Aomori Prefecture. 2. Host plant, *Heracleum lanatum* var. *lanatum* (Apiaceae). 3. A pair of adults mating on a leaf of *H. lanatum* var. *lanatum*. 4. Oviposition scars (arrows) on a stem of *H. lanatum* var. *lanatum*. 5. A discharge hole for larval excretions (arrow) on a stem of *H. lanatum* var. *lanatum*. 6. A larva in a stem of *H. lanatum* var. *lanatum*.

ることを明らかにした。しかし、幼虫は未確認であったため、オオハナウドが真に本種の寄主であるかは不明であった。

2006 年 7 月上旬、筆者は同地でオオカツオゾウムシの生態調査を行い、本種がオオハナウドを寄主利用することを確認したのでここに報告する。

16 頭、青森県北津軽郡中泊町小泊青岩、7. vii. 2006、吉武 啓・中原直子採集（農環研所蔵昆虫標本番号 24-0465149~24-0465164）；2 頭、同地、7. vii. 2006 オオハナウド生茎採取、6. viii. 2006 羽化脱出、吉武啓採集；4 頭、青森県東津軽郡外ヶ浜町三厩龍浜竜飛崎、7. vii. 2006、吉武 啓・中原直子採集（農環研所蔵昆虫標本番号 24-0465165~24-0465168）。

中泊町の生息地は、竜泊ライン（国道 339 号）西側、青岩一片刈石林道入口間の斜面にある草地で、良好なオオハナウド群落が存在していた（Figs. 1, 2）。主としてオオハナウド葉上に多数のオオカツオゾウムシ成虫が見られ、交尾行動（Fig. 3）や産卵行動を確認できた。茎に本種のものと思われる産卵痕（Fig. 4）や糞の排出孔（Fig. 5）があったことから、試みに数本を切断して割ってみたところ、茎中央部を剥き抜くように太い食痕が走っており、それを辿って行くとゾウムシの幼虫を発見できた（Fig. 6）。検した茎数は少ないが、1 本の茎の中から見出された幼虫数は全て 1 頭であった。ただ、産卵痕が二つ三つ近接して見られることも少なからずあったので、このような場合には、限られた食餌資源をめぐって幼虫の共食いが起こるのかも知れない。いずれにせよ、茎ごとの産卵数は少ないと言えるだろう。オオハナウド茎内の幼虫がオオカツオゾウムシであるという確証を得るため、糞の排出孔がある茎を数本持ち帰って保管したところ、約 1 ヶ月後に本種の新成虫が 2 頭脱出してきた。余談だが、飼育下で本種の成虫にセロリとセリ、アシタバ、ミツバ、ミズナ、パセリを与えてみたところ、セロリを最も好んで食し、セリは多少口にするものの、その他は全く食さなかった。

一部の多産地を除き、日本においてオオカツオゾウムシは非常に稀な種である。半世紀以上本種の記録がない神奈川県では、既に絶滅したと考えられており、その要因として食草の減少や生息環境の悪化が挙げられている（高桑・勝山・木場編、2006）。良好な草地環境の減少は全国的な問題であるため、今後本種の生息状況を正確に把握するために各地での調査が必要である。

末筆ながら、青森県産オオカツオゾウムシについて種々ご教示下さった堀川正美氏に厚くお礼申し上げる。

引用文献

- EGOROV, A. B., ZHERIKHIN, V. V. & B. A. KOROTYAEV, 1996. Curculionidae. *In*: Key to the Insects of Russian Far East (Ler P. A., ed.). Volume III. Coleoptera. Part 3. pp. 249-311, 431-516. Dal'nauka, Vladivostok.
- HONG, K. J., A. B. EGOROV & B. A. KOROTYAEV, 2000. Illustrated catalogue of Curculionidae in Korea (Coleoptera). *In*: Insects of Korea (PARK K. T., ed.), 5. 340 pp. Korea Research Institute of Bioscience and Biotechnology & Center for Insect Systematics, Korea.
- 堀川正美, 2000. 津軽西海岸のオオカツオゾウムシ. 月刊むし, (358): 16.
- 高桑正敏・勝山輝男・木場英久編, 2006. 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. 442 pp. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

◇採集をめぐるトラブルに関するアンケート結果◇

日本鞘翅学会自然保護委員会

2009 年 7 月に、会員を対象に実施した表題のアンケートに対して、多くの回答が寄せられました。これを集約した全文はすでに当学会ウェブサイト上に掲載していますが、誌面の都合から、ここでは概要を簡潔にまとめて報告します。

1. 採集活動が周囲に影響を及ぼした例として、ゲンゴロウ類採集による湿原の荒廃や、コガネムシ類採集による牧場所有者とのトラブル、あるいはカミキリムシ類やタマムシ類の採集者の集中による採集禁止措置などがみられた。
2. トラップに関するものとして、クワガタムシ類用のトラップのストックングやオサムシ・ゴミムシ類用のピットフォールトラップなどの放置、入った目的外の昆虫死骸の遺棄、FIT やライトトラップの通報などがみられた。
3. 過度の採集として、孤立個体群が採集により見られなくなった例、1 種類の昆虫を数百個体採集した例などがみられた。
4. 違法採集関連として、法により規制された種類の無許可での採集や、インターネット上のタイ

ムリーな情報がそうした行為を助長している例、また、巡回者による根拠のない取締りなどがみられた。

5. 外来種の持ち込みに関するものとして、外国産カブトムシ類の各地での逸出、あるいはペット目的で持ち込まれたと考えられる外国産のハムシの発生などがみられた。
6. トラブルの回避事例として、クワガタムシの採集者が集中する場所で、私有地への立ち入りを回避するために民宿等が指定場所を提供した例がみられた。
7. 情報の制限によるマイナス面として、過剰な採集への対策から情報の非公開が慣例化し、保全に向けた調査・啓発に制約がかかる例もみられる。

上記の結果をふまえ、調査研究活動を将来にわたって続けるための社会環境を整える目的で、自然保護委員会では採集に関するガイドラインの作成に着手しています。ご回答いただいた会員各氏に御礼を申し上げますとともに、会員各氏におかれては、今後も採集・調査活動の際には、より一層の自覚と配慮をお願いいたします。（担当：永幡嘉之）

○FITにより採集された伊豆諸島三宅島のコムツキダマシ

伊豆諸島からは、これまでに12種のコムツキダマシ科甲虫の記録があるが、三宅島からの記録は少なく、三宅島と明記されたものは、わずかに2種(うち一種はコムツキダマシの一種として)に過ぎない。筆者は、福澤卓也氏を通して、三宅島で浅野貴裕氏が衝突板トラップ(FIT)により採集されたコムツキダマシの標本を調査すること機会に恵まれた。標本は、全体で20個体と多くなかったが、その中には8種のコムツキダマシが含まれており、いずれも三宅島からこれまで記録のないものであることが判明したので、ここに分布資料として記録しておくたい。

本報告をするに当たり、三宅島の貴重な標本をご恵与くださった長野市の浅野貴裕氏、また、大変お世話になった東京農業大学の福澤卓也氏にこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

1. オオチャイロコムツキダマシ *Fornax victor* FLEUTIAUX, 1923
2 exs., Tsubota, 26-29. VII. 2006.
北海道から屋久島まで広く分布する種であるが、伊豆諸島においては、八丈島からの記録しかなかった(鈴木, 2007)。
2. コチャイロコムツキダマシ *Fornax nipponicus* FLEUTIAUX, 1923
1 ex., Hinoyama Pass, 26-29. VII. 2006; 1 ex., Miyake-jima Is., 26-29. VII. 2006.
久松(1985)の保育社の図鑑には分布として伊豆諸島があげられているが、詳細な島名の明記はないため、データを伴った伊豆諸島からの記録は、これが最初となる。
3. ハチジョウチャイロコムツキダマシ *Fornax hachijonis* HISAMATSU, 1963
1 ex., Tsubota, 26-29. VII. 2006; 1 ex. Miyake-jima Is., 26-29. VII. 2006.
八丈島産の個体に基づいて命名記載された後、琉球や小笠原諸島からの記録があるが、三宅島からの記録はこれまでなかった。
4. ヒメチャイロコムツキダマシ *Fornax consobrinus* HISAMATSU, 1963
1 ex. Miyake-jima Is., 26-29. VII. 2006.
久松(1985)の保育社の図鑑には分布として伊豆諸島があげられているが、詳細な島名の明記はないため、データを伴った伊豆諸島からの記録は、これが最初となる。
5. ケモンヒメミゾコムツキダマシ *Dromaeolus cariniceps* FLEUTIAUX, 1923
3 exs., Tsubota, 26-29. VII. 2006; 1 ex., Tsubota, 25-30. VIII. 2006; 1 ex., Miyakejima Is., 26-29. VII. 2006.
本種は、ヒメミゾコムツキダマシ属の中では、上翅基部の毛がやや黄色となる特徴のある種である。伊豆諸島からは、これまで八丈島の記録があるに過

ぎなかった(鈴木, 2006)。

6. ミナミヒメミゾコムツキダマシ *Dromaeolus marginatus* HISAMATSU, 1965
3 exs., Hinoyama Pass, 26-29. VII. 2009; 2 exs., Miyakejima Is., 26-29. VII. 2006.
八丈島と台湾産の個体に基づいて HISAMATSU (1965)により命名記載された種であるが、伊豆諸島からはその後、まったく記録がなかった。今回の記録は、原記載に続くものである。
7. ワタナベホソコムツキダマシ *Nematodes watanabei* HISAMATSU, 1963
1 ex., Tsubota, 26-29. VII. 2006
御蔵島で採集された個体に基づいて命名された種である。その後、本州から台湾にいたる地域で点々と記録がされているが、三宅島からの記録はこれまでなかった。本種は、体長に大きな個体変異がみられるが、今回得られた個体は、5 mm と特に小型なものであった。
8. コガタフチトリコムツキダマシ *Dirhagus mystagogus* FLEUTIAUX, 1923
1 ex., Tsubota, 26-29. VII. 2006; 1 ex., Tsubota, 25-30. VIII. 2006.
北海道から琉球(トカラ中之島)まで、広い地域に分布することが知られているが(久松, 1985)、伊豆諸島からの記録はこれまでになかった。
伊豆諸島には、上記の他に、スジヒゲコムツキダマシ *Proxyllobius helleri* FLEUTIAUX, 1900 (久松, 1985: 三宅島)、キンケヒメフトコムツキダマシ *Bioxylus pilosellus* HISAMATSU, 1959 (澤田・渡辺, 1969: 御蔵島)、クシヒゲチャイロコムツキダマシ *Hodocerus malaisiensis* BONVOULOIR, 1872 (梅谷, 1955: 三宅島 [コムツキダマシの一種として報告されたものは、写真から判断すると本種と思われる]; 久松, 1985: 伊豆諸島)、クロヒメミゾコムツキダマシ *Dromaeolus lewisi* FLEUTIAUX, 1923 (澤田・渡辺, 1969: 御蔵島)、ニホンヒメミゾコムツキダマシ *Dromaeolus nipponensis* FLEUTIAUX, 1923 (久松, 1985: 伊豆諸島)の5種のコムツキダマシが生息することが知られているが、他の昆虫に比べると調査は十分に尽くされているとはいえない。最近多くの昆虫の調査に用いられているFITは、コムツキダマシの生息を確認するには、とくに有効な調査方法と考えられ、今後同様の調査が各島でおこなわれれば、多くの未記録種が発見されるであろう。

参考文献

- HISAMATSU, S., 1963. Six new species of Eucnemidae from Japan (Coleoptera). *Trans. Shikoku, ent. Soc., Matsuyama*, 8: 26-34.
- HISAMATSU, S., 1965. Some beetles from Formosa. *Spec. Bull. Lep. Soc. Jap.*, (1): 130-140, 17 figs.
- 久松定成, 1985. コムツキダマシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著, 原色日本甲虫図鑑(III): 41-50

(pls. 8-9). 保育社, 大阪.
 沢田玄正・渡辺泰明, 1969. 御蔵島の昆虫相. 農学集報, 14(1): 1-48.
 鈴木 互, 2006. 伊豆諸島八丈島におけるケモンヒメミンゾコメツキダマシの記録. 甲虫ニュース, (153): 28.
 鈴木 互, 2007. 伊豆諸島八丈島におけるオオチャイロコメツキダマシの記録. 甲虫ニュース, (157): 5.
 梅谷献二, 1955. 伊豆七島昆虫風土記2~三宅島の記~. 新昆虫, 8(8): 14-19.
 渡辺泰明・相馬州彦, 1972. 三宅島の昆虫相. 農学集報, 17(1): 1-58.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○ニッポントゲバゴマフガムシを佐渡で採集

ニッポントゲバゴマフガムシ *Berosus (Enoplurus) nipponicus* SCHÖDL, 1991 (図1) はTokioを模式地として記載されたガムシで, パラタイプの産地としてKiotoが含まれている. 旧北区東部に分布するトゲバゴマフガムシ *Berosus (Enoplurus) lewisius* SHARP, 1873にきわめて良く似ており, 識別にはオス交尾器の検討が必要である.

筆者は手元の標本を検討した結果, 佐渡でニッポントゲバゴマフガムシを採集していたので報告する.

6 exs., 新潟県金井町金北の里 休耕田(佐渡島), 8. VIII. 1999, 筆者採集.

すでに述べたとおり, 本種の同定はオス交尾器を検討しなくてはならない. *B. nipponicus* は, 中央片の両側縁が平行で全体に長く, 先端は明瞭に窪む(図2の左). これに対して *B. lewisius* は, 中央片が全体にへら状で中央が膨らみ, 先端に向かって狭まっていく(図2の右). また, *B. lewisius* の先端は *B. nipponicus* のように大きく窪むことはなく,



図2. トゲバゴマフガムシ類のオス交尾器中央片. 左がニッポントゲバゴマフガムシ *B. nipponicus*; 右がトゲバゴマフガムシ *B. lewisius*.

先端付近に逆立った微小な刺が広く密生していることも特徴である(ただし *B. nipponicus* にも刺はある). このように形状の違いは明瞭ではあるが, 乾燥標本ではこの違いが意外とわかりにくいようである. お湯などで軟化して, 光学顕微鏡で観察するのが確実に区別する方法である.

トゲバゴマフガムシの記録は国内の各地であるが, この中にニッポントゲバゴマフガムシが混じっている可能性がある. 本種の分布を解明する上でも, ぜひトゲバゴマフガムシのオス交尾器の検討をお願いしたい.

最後に, 佐渡での調査に同行いただいた岩井大輔氏, 文献の提供をいただいた吉富博之博士にお礼申し上げます.

引用文献

SCHÖDL, S., 1991. Revision der gattung *Berosus* LEACH 1. Teil: Die orientalischen Arten der untergattung *Enoplurus* (Coleoptera: Hydrophilidae). *Koleopterologische Rundschau*, 61: 111-135.

(ホシザキグリーン財団, 林 成多)

◇甲虫ニュースに投稿される方へ◇

原稿をワープロで作成される場合, 刷り上がり2頁を超える報文は1行49字, 短報は1行23字にそろえ, FDやCDとプリントアウトした原稿を1部つけ下記宛にお送りください. 写真等が複数ある場合は, 余白などをうまくカットして組み合わせた図版を作成してください. 付図がない場合には, 原稿を電子メールの添付ファイル(一太郎かワード)でお送りくださってもかまいません. なお, その際は, 迷惑メールと区別できるよう, 件名の中に「お名前と甲虫ニュース投稿」を必ずお入れください.

原稿送付先: 鈴木 互

〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-14-13

電子メール: wsuzuki@hosei2.ed.jp

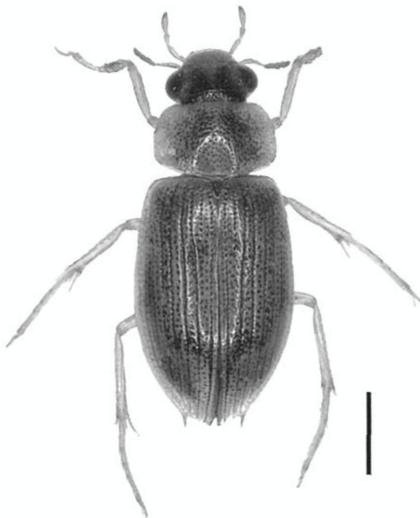


図1. 佐渡島産ニッポントゲバゴマフガムシ♂. スケールは1mm.

新刊紹介

青木淳一著(2009)「ホソカタムシの誘惑—日本産ホソカタムシ全種の図説—」, 東海大学出版会, iv+194頁, 本体価格2,800円, ISBN978-4-486-01855-1.

甲虫屋にとって「読んで楽しく、眺めてこれはすごい」と、びっくりするような本が出版された。上記表題の本である。著者は、土壌動物とりわけササラダニの研究者として著名な青木淳一さんと知ってまた驚く人が多いに違いない。

著者とホソカタムシとの係わり合いについては、この本の中で高校生時代にホソカタムシの姿・形、そして体の表面に見られる見事な彫刻に「一目惚れ」したことによると書かれている。しかし、その後の大学生時代からは、土壌動物の研究に取り組んで、この分野に多大な貢献をされてきた。そして「神奈川県立生命の星・地球博物館」の館長を定年退官されたのを機会に、焼けぼくくいに火がついたかのように、若い時に惚れ込んだホソカタムシに対する情熱を再燃させている姿勢は、釣り人が言う「釣りは鮎に始まり鮎に終わる」の言葉を思い起こさせる。このように著者がホソカタムシの研究者としてカンバックしたと思う間もなく、次から次へとホソカタムシに関する重要なオリジナル論文を発表されている積極的な行動力には脱帽の思いである。

ともあれ、この本の内容を紹介すれば次の通りである。1章 ホソカタムシに関するQ&A, 2章 ホソカタムシの魅力, 3章 ホソカタムシの研究法, 4章 採集日記から, 5章 ホソカタムシ採りの名人達, 6章 日本産ホソカタムシ種名リスト, 7章 日本産ホソカタムシ図説(分布図つき)。

この内の1章から5章までは「あとがき」に書かれているように、ホソカタムシに関するエッセイ風の読み物になっている。これらの章は、ホソカタムシに対する著者の思い入れの強さがほとぼり出ているように思われ、一方、最新の採集法に基づいてのホソカタムシの見つけ方、採り方についての原色写真をもちいての解説は、今後ホソカタムシの採集を志す者にとって大変有益な指針となるだろう。とかく大学などで教職にたずさわった人達の文章は、堅苦しく説教調になりがちだが、さすがに何冊ものエッセイ風の本を上梓されている著者の文章は、終始平明な語り口で読む者をホソカタムシの世界に引き込んでしまう。6・7章は前章までの内容とがらりと変わって学術的な内容となっている。6章はこれまで日本から記録された48種の種名が列記されているが、それとともにそれぞれの種について、記録された地点の多少に基づく「珍しさ」のランク付けが1から10までなされているのは、いかにも著者らしいオリジナリティを感じさせる。7章では日本産48種全種について、それぞれ種ごとに形態の特徴、種名(学名・和名)の由来、分布地、原産地、既知採集記録、新採集記録、すみ場所等について記述され、それに加えて全形図が添えられていて各種をフルコースなみに紹介している。特に、種ごとに添えられた全形図は、著者を魅了させた見事な体表の彫刻が、「精魂こめて」の言葉通りに克明に描かれており、見る者の目を引きつけて放さない。さらに、描かれた標本の産地まで書かれている念の入れようである。このように、この本1冊あれば日本産ホソカタムシは全形図との照合で種名を知ることができ、それに基づいてそれぞれの種の生息場所や分布地をもたちどころに知ることができるといった、ホソカタムシに関する情報をすべてカバーしている折々極めて便利な本である。また、ホソカタムシ愛好者ばかりでなく、甲虫屋ならばこの本を座右に置いて、折々にホソカタムシの芸術的とも言える独特な彫刻が描かれた全形図を眺めながら、これらの虫との対話を楽しむ至福の時間を持つことができる。

なお、この本を基として今後装いを新たに、「The Insects of Japan」シリーズの「Bothrideridae」として発刊されることを期待して本書の紹介の締めくくりとしたい。

(町田市, 渡辺泰明)



◇会計報告◇

1. 2008年度決算(2008年1月1日～12月31日)

収入	予算	決算	増減
前年度繰越金	2,200,000円	3,015,800円	815,800円
会費	4,200,000	4,362,500	162,500
広告費	60,000	60,000	0
出版物売上金	50,000	354,865	304,865
雑収入	0	3,644	3,644
合計	6,510,000	7,796,809	1,286,809

支出	予算	決算	増減
会誌印刷費 (Elytra)	2,200,000円	2,782,500円	582,500円
会誌印刷費 (甲虫ニュース)	1,000,000	1,110,690	110,690
会誌送料	750,000	764,228	14,228
通信費	50,000	90,099	40,099
事務費	150,000	137,794	△12,206
大会助成費	100,000	100,000	0
予備費	50,000	21,000	△29,000
次年度繰越金	2,210,000	2,790,498	580,498
合計	6,510,000	7,796,809	1,286,809

2. 特別会計 2008年度決算

収入	支出
前年度繰越金	2,069,005円
次年度繰越金	2,072,229円
利息	3,224
合計	2,072,229

(会計担当, 齊藤明子)

◇2009年度大会報告◇

2009年度日本鞘翅学会第22回大会は日本昆虫学会関東支部第46回大会と合同で、11月14～15日の2日間、岡島秀治大会会長のもと、東京農業大学厚木キャンパスにおいて開催されました。参加者は170名程で盛況となりました。2日間におよぶ一般講演の口頭発表23題、ポスター発表7題で、合同大会らしく甲虫目以外の発表が5題含まれ、講演内容も分類、系統、保全、生態等と多岐にわたりました。そのほかにも、公開シンポジウム「昆虫の和名について考える」と題して行なわれ、標準和名に関する魚類・トンボでの検討事例と私見、甲虫・昆虫全体での私見からなる4名の発表がありました。その後、総合討論が行われ、発表者との質疑のほか、アマチュアとしては和名がないと困る、新種を記載した著者には論文中あるいは甲虫ニュースに和名を記して欲しい等の意見が出ました。なお、発表の中で東京農大の先生でもあった矢野宗幹が、奇しくも20世紀初頭に標準和名の概念と命名法の原型を作った一人であったことは私には驚きでした。今

大会でも同定会には多くの人が集まり、分科会もそれぞれ盛り上がっていた様子でした。

総会では、学会発足時から会計幹事を務められた齊藤明子氏に代わり、新会計幹事に長谷川道明氏が推挙され、承認を得ました。また、チビゴミムシを主とする洞窟性甲虫の分類学的研究で著名な上野俊一先生が名誉会員に推挙され承認されました。今回の名誉会員の推薦は、上野先生の学問的貢献に加え、長年の間、*Elytra*の編集にご尽力され、編集委員長や会長を歴任いただいたご功績により会員諸氏の賛同を得たものです。さらに、日本甲虫学会との合併へ向けて、新里達也会長から会則(案)と両学会長による合併に関する覚書が提示され承認されました。

来年度の第23回大会は、2002年に日本甲虫学会と合同大会を行なった大阪市立自然史博物館で開催を予定しています。会員諸氏のご参集をお願い申し上げます。

(庶務担当, 島田 孝)

◇会員動静◇

(2008年11月～2009年10月)

◇会 告◇

日本鞘翅学会と日本甲虫学会は、2008年11月の松山合同大会から1年間、両学会の合併について慎重に協議を行なった結果、2010年より合併することで基本的な合意に至った。両学会長は、合併が日本の甲虫学の発展に寄与するとともに、相互の歴史と文化を尊重する対等合併である旨を明記した覚書を作成し捺印した。さらに、新学会会則(案)を、それぞれの学会の2009年度総会に提出して承認を得ることにより、2010年から新学会が発足する。なお、初年度2010年は移行期間として、両学会の現行事業を引き継ぎながら、実質的な事業統合の調整と協議を行うとともに、2011年以降に組織される新体制の学会長ならびに評議員の公選を実施する。新学会の名称は「日本甲虫学会(Coleopterological Society of Japan)」となる。

(日本鞘翅学会会長 新里達也)

◇学会の発行物・バックナンバー販売委託先◇

昆虫文献 六本脚

〒102-0075 東京都千代田区三番町 24-3
三番町 MY ビル 3階

TEL: 03-6825-1164

FAX: 03-5213-1600

E-mail: roppon-ashi@kawamo.co.jp

URL: <http://kawamo.co.jp/roppon-ashi/>

甲虫ニュース 第168号

発行日 2009年12月30日

次号は2010年3月下旬発行予定

発行者 新里達也

編集者 鈴木 互(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎,
奥島雄一, 吉富博之

発行所 日本鞘翅学会

〒169-0073 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第2研究室

電話 03-3364-2311

原稿送付先(甲虫ニュース) 鈴木 互

〒156-0053 東京都世田谷区桜 3-14-13

電子メール: wsuzuki@hosei2.ed.jp

印刷所 (株)国際文献印刷社

年会費 2009年度 7,000円(一般会員)

郵便振替口座番号 00180-3-401793

ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/jsc2/index.html>

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒142-0051 東京都品川区平塚2丁目5番8号

郵便振替 00130-4-21129

電話 (03) 5858-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3784-6464

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社